

### 第3章 ラジオ番組内のコーナー終了部分における相互行為分析

インタビュー班

#### 0. はじめに

「番組の構造は、どのようにスタジオ内の相互行為の構造と結びついているのか。」これがまず私たちの問いかけである。それを分析するために私たちは、ラジオ放送におけるあらゆる相互行為の中で、番組内のコーナー<sup>(1)</sup>の終了部分に注目した。この部分を分析することで、コーナーの終了の仕方がどのようにスタジオ内の相互行為のありようと結びついているかを明らかにできるのではないかと考えたのである。そこではあらゆることが分析可能である。ラジオ放送において、コーナーを終わらせるためには、会話を終了させることが不可欠である。しかし私たちがここで提示するトランスクリプトには、コーナーが終了した後もう1度（いや2度）会話の終了を表すと思われる語、言い換えれば終了を表す語の組み合わせが発言されているのだ。つまり“終了が2度（いや3度）ある”ように見えるのだ。これは私たちにはとても奇妙なことのように思えた。まずこの場面をトランスクリプト<sup>(2)</sup>を使って分析してみよう。

#### 1. 第1番目の終了部分

〈断片1〉 データX 9:58'08"～9:58'54"

〔I面〕

↓①

I P P P P P

Y: その:

P M M M M M M P P P P P P P P P P P

I: じゃその女性像も（.）これから（.）鎌倉時代入ってどう変わっていくかっ

P P

S:

P P

G:

P P

K:

〔Ⅱ面〕

PPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPIPPPPPPPPPPPPPPPP  
Y : はい あどうもありがとう

PPPPPYYPpppppppppppppppppppppppppppppppp  
I : てのまた次回楽しみですね どうもありがとうございました//

PPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP  
S : //ありが

PPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPIIIIIII  
G : //あり//がとう

PPPPPPPPPPPPPPPIIIGIIIIIIIIIIIIIIIIII  
K :

---

〔Ⅲ面〕

【会釈】 ↓②

PPPPPPPPPIIIIPpppppppppppppppppppppppp  
Y : ございました

PPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP  
I : え今日は元県立文書館館長大和武生さんにお話を伺いました(.)

MMMMMMMMMMMMMMMMMMMMPPPPPPPPPPPPPPPP  
S : とうございました

G : ございました

K :

---



---

---

〔VI面〕

↓③

【会釈】

↓④

中中腕腕腕腕腕PPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP

Y :

【イヤホンはずす】

PPYYYYYYYYYYYYPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP

I : hhどうもありがとう//ございました

PPYYYPP

S : //ありがと//うございました

G : //お世話になりました :

K :

---

---

〔VII面〕

↓⑤

【立ち上がる】

PPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP中中中中中中中中中中中中中中中中中PPPPPP  
Y : 昼から阿南市で講演が// それでは

PPPPPPYYYYYYYYPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPPP右左下  
I : //ふう //あっそうなんです//か

PP  
S : //ふう //忙しいですね

G : //ふう

K :

---

---



この場面は「阿波の歴史シリーズ」<sup>(3)</sup>というコーナーの終了部分である。

私たちは前に終了部分が2度いや3度存在すると書いた。まず第1番目の終了部門であるが、これはOnAir中、つまりコーナーの最後の部分である。トランスクリプトでいうと、アナウンサーであるIの「じゃその女性像もこれから...。」〈断片1. I面の①〉に始まり、Sアナウンサーの「ありがとうございました。」〈断片1. III面の②〉までの部分であろう。ここを第1番目の終了部門と私たちは考えた。ここの終了部門について少し詳しく見てみよう。

ここに見られるIの「じゃその女性像もこれから...。」という発言は終了部門の導入と言えるだろう。Y, I, S, G, 4人による「(どうも)ありがとうございました」が終了交換であるとも考えられる。終了部門は終了交換によって完結するのである。では導入部分をより詳細に見てみよう。Iの「じゃその女性像もこれから...。」〈断片1. I面の①〉という発言は、シェグロフ&サックスの言う「話題限定 (Topic bounding)」あるいは「未来の取り決め」と同様のもので、終了を導くものと言える。ちなみに「話題限定」の説明はこうである。「これは一方の話し手が昔ながらの知恵を格言的あるいは警句的に表現したものをを用いることからなっている。(中略)このような表現は『合意を得やすい』ので、この表現が一方の者から与えられ、他方の者が合意を示した場合、話題は終了に持ち込まれたのだと受け止められるだろう。」[シェグロフ&サックス 1972=1995: 203] つまりこれはこういうことである。話題を限定することによって、それまでの話を終了する準備をするのだが、ここでのIもまた同じ作業をしている、ということである。そしてこの後に、返答としてのYの「はい」〈断片1. II面〉が続くことから考えて、ここで先終了 (Pre-closing)<sup>(4)</sup>が行われていると考えられる。ここでのYの「はい」〈断片1. II面〉は、もうY自身が話すことはないという、Y自身の“発話権のパス”となっている。そしてそれが終了交換へと結び付いていると私たちは考えている。この場合〈断片1. I面の①〉について言えば、かなり強引な割り込み〈断片1. I面. Iの「じゃ...。」〉によって終了部門は始まっているが、終了部門自体は、うまくいった、ととることができるだろう。これが第1番目の終了部門である。もう少し説明すると、第1番目の終了部門は、放送番組内のコーナーの終了である。そしてリスナーが志向されている(≡マイクに会話が入るように気をつけられている)終了であると言える。

## 2、第2番目の終了部門

では私たちが考える第2番目の終了部門について見てみよう。第2番目の終了部門は、音楽が流れ始めてすぐ後のところである。〈断片1. VI面の③~④〉つまりリスナーには音楽だけが聞こえている状態である。ここでは、Sが曲を紹介し終えてすぐカフを下ろす行為、そしてIがイヤホンを外しながら体の向きを変え、Yを見るという一連の行為〈断片1. VI面〉が終了部門の導入となっていると分析できる。そしてIの「どうもありがとうございました」という発言と、Yの会釈〈断片1. VI面〉によって終了交換が行われたと言えるだろう。第2番目の終了部門は放送番組内のコーナーのために焦点づけられた集

まりの<sup>(5)</sup>終了である。ここでの終了は、マイクが無視されているものの、終了交換が体系的であると言える。(Iがリードして発言しているが、ほとんど同時発話のような状態で、I、S、Gが「ありがとうございました」「お世話になりました」と発話している。これらは一体のものとみなせる。)これが、第2番目の終了部門である。

### 3, 第3番目の終了部門

次に私たちが考えたのが、第3番目の終了部門があるのではないかと、ということである。第3番目の終了部門は、〈断片1のⅦ面の⑤からⅧ面の⑥〉までと私たちは考えた。

「昼から阿南市で講演が…」〈断片1.Ⅶ面〉というYの発言は、「明示的な宣言」[シェグロフ&サックス, 1972=1995:211]のように思える。この発言は明らかに会話を終了させようとしているように思える。次の約束を持ち出すことは、会話を終了させる有効な手段の一つと言えるだろう。シェグロフとサックスは「行かなくちゃ」という言葉について説明している。そこでの「行かなくちゃ」は、Yの発言と同等の意味を持つと言えるだろう。「『行かなくちゃ』は、引き続き談話がなされることを禁止することができないし、また他者が、この発話の後に、言いたかったが言えなかったことを導入することもあるものの、しかし明らかに『わかった』<sup>(6)</sup>がともなうのと同じ結果を招くことはない。『行かなくちゃ』が用いられた場合、話題にもとづく談話を再び始めるという特殊な代替肢は発動しない傾向がある。だから終了部門を開始することにおいては、この先終了句の方が、『わかった』よりも効果を発揮する傾向にある。」[シェグロフ&サックス, 1972=1995:212]このことから、ここでのYの発言は終了部門を開始するための先終了句と読みとれる。そしてこのYの「それではどうも」、Gの「お世話になりました」〈断片1.Ⅶ面～Ⅷ面〉が終了交換にあたる。

このように第3番目の終了部門を経て、Yは立ち去ることができた。また逆に、Yが立ち去ったことから、〈断片1のⅦ面からⅧ面〉が終了交換と言える。これが第3番目の終了部分である。第3番目の終了は、スタジオに同室している焦点づけられてない集まりの終了と言える。ここではマイクも無視されているし体系的であるとも言えない。第2番目の終了と違って全員参加の終了はなく個人個人がかってに終了を行っている。又、私たちはトランスクリプト中にある「お世話になりました」〈断片1.Ⅵ面とⅧ面〉に注目した。本番のコーナーが終了する時Y. I. S. Gは「ありがとうございました」〈断片1.Ⅱ面〉と例外なく発言している。しかしコーナーが終了してしまった後Gは「お世話になりました」と発言している。確かに「ありがとうございました」も「お世話になりました」も会話を終了させる(終了変換)の可能性のある語ととることができる。しかし、もし「お世話になりました」を本番中に発言したらどうであろうか。それはあまりにも不自然と言えるのではなからうか。明らかにGもSも「ありがとうございました」「お世話になりました」を使い分けているといえるだろう。

ではなぜか。なぜ「お世話になりました」は番組中に使えないのか。これについて榎田は賢明な主張をしている。「アナウンサーは放送中は『お世話になりました』は言えないんですよ、だって『お世話になりました』は業務上の会話に聞こえるんですよ。いわゆる

ゴッフマンのいうバックリージョン（裏領域）<sup>(7)</sup> と言うんですかね。つまりね『お世話になりました』ってのは放送局側の人間が言うべきセリフなんですよ。アナウンサーは放送局側の人間ではあるけれども放送中は業務性があらわな発言はしないようにしているんだよ。でもね『ありがとうございました』は放送中でもそうでなくても使っていていいわけ。」  
[樫田・1998.1.30] つまり「お世話になっています」と発言されているときは業務の域の中にある。そして確かに「ありがとうございました」と「お世話になりました」は使い分けられているのだ。

「昼から阿南市で講演が…」〈断片1.VII面〉というYの発言はこの第3番目の終了部門の先終了句であると述べた。ここではこのセリフが発せられた状況からYが立ち去るまでについて分析する〈断片1.VII面.VIII面.IX面〉。

第2番目の終了を終えた後、つまりコーナーのための集まりの（解放）がなされた後、Yはこの発言をしている。このYの発言は唯一Iだけの視線を獲得した。しかしすぐIは視線をそらしている。Sも視線を合わせず「忙しいですね。」と発言している。GもKも視線を合わせない。まるで他の全員が無視しているように感じられる。なぜか。それはここで会話が弾んでしまうことを恐れていたからと言える。会話が長引いてしまえば放送事故にもなりかねない。第2番目の終了部門が終わった後全員下を向いたままであった。そういう状況下で発せられたのがこの「昼から阿南市で講演が…」という発言である。私たちはこのYの発言は先終了句であると述べた。この発言はその後のYの「それではどうも。」の引き金になっていると感じられた。この発言でYは視線を獲得できなかったものの、返答は獲得できた（Iの『あっそうなんですか』とSの『忙しいですね』）。つまり先終了できたのである。それによってYは「それはどうも。」と発言できたのだ。その後立ち去る時も学生に会釈しながら「がんばって下さい」と発言しながら立ち去っている。このことから言えるのは人を加入させてまで終了するきっかけが探し求められることがあるのだということである。このことについて西阪はグッドウィンの主張を取り入れて論じている。<sup>(8)</sup> そしてあいさつなしでは立ち去ることができない場面だったとも言えるだろう。

ここまで終了部門について考察してきた。その結果私たちは“終了が3回存在する”ということに関する分析ができたと思っている。そしてその3つの終了の意味が異なっていることにも言及してきた。もし私たちが主張するように、3度も終了が完了しているなら、3つの異なったものが終了部で終了していると考えるのが普通ではないだろうか。しかしここで新たな疑問が生まれてきた。それは「終了が3度あるということは開始（はじまり）も3度あるのではないか。」という疑問である。次の節でそれに触れることとする。

#### 4. 開始は3度ある（か）

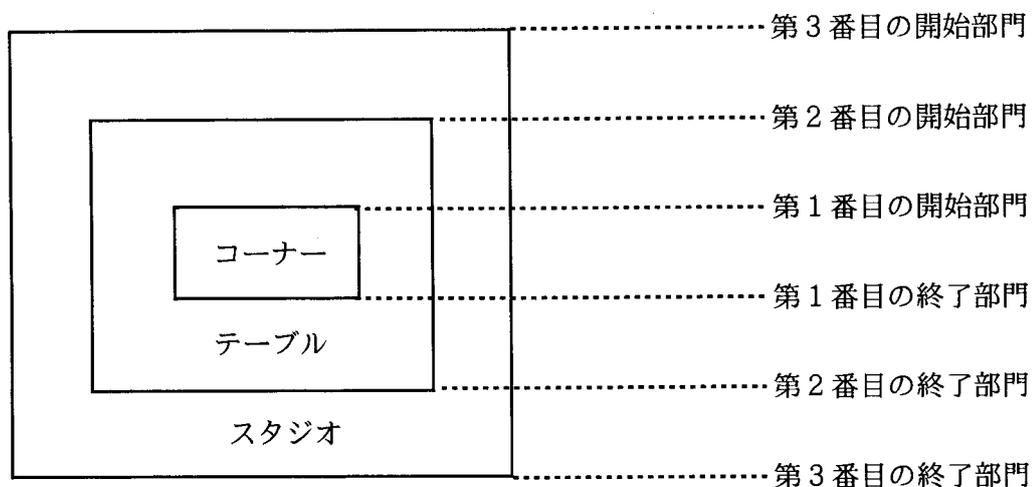
前節で開始（始まり）は3度あるのではないかと述べた。残念ながら「阿波の歴史シリーズ」の開始部分のトランスクリプトは紙幅の都合上のせることはできないが、結論から言ってしまうれば開始は3度あるということだろう。では「阿波の歴史シリーズ」の開始部分についてできるだけ詳しく述べてみたい。

まずYが「阿波の歴史シリーズ」に参加するためスタジオのドアを開けて入ってくる。この時Gが出迎いのあいさつをかわしている。ここまでが第3番目の始まりである<sup>(9)</sup>。つまり焦点づけられてないスタジオ内の集まりにYが入ってきたと言える。では第二番目の始まりは、テーブルの近くに寄ってきて、アナウンサー(I・G)やコメンテーター(K)とあいさつをかわし、席に着いたところである。ここでコーナーのための集まりが完了したといえる。ここでしばらく沈黙があるのだが、IはいきなりYさんに何の前ぶれもなくYに「途中で一回CM挟みます。」と発言している。このことことからYはすでにこのコーナーの集まりに加入していると言えるし、第2番目の始まりはもう起こっていると言える。このように考えると第1番目の始まりはOn Airのコーナーの始まりを意味する。ここで明確なゲストの紹介があって然るべきなのだが、なぜかゲストの紹介がなされることなくコーナーが始まっている。<sup>(10)</sup>けれどここでIによって「さあウェブリポートの時間です。」という明確なコーナーの始まりが宣言されている。このことから考えて、ここが第1番目の始まりと言えるだろう。このように始まりもやはり3度あるのである。

#### 5. 3度の終了と3度の開始(始まり)の構造

この節では今まで説明してきた3つの終了部門と3つの開始部分がどのような構造になっているかを図を使って説明してみよう。

〔図1〕



(時間は上から下に流れている)

第1番目の終了部分はコーナーの終了を意味する。トランスクリプトで言えば〈断片1. I面. II面. III面. IV面〉のところである。コーナーと書いてある部分はOn Air中を意味する。ここでの終了は、ゲストを迎えての会話の終了を意味する。ここでの終了は体系的なものである。第2番目の終了部門は、コーナーが終わってすぐのところである。ト

ランスクリプトで言うと〈断片1．VI面〉である。ここは放送番組内のコーナーのために焦点づけられた集まりの終了である。ここでGは「お世話になりました」と発言とすることからもわかるように、ここはもちろんOnAir中ではない。裏局域にあたるのだ（このことは3節で述べた）からマイクも無視されている。そして参加者全員がテーブルを囲んで終了交換していると言える。つまり体系的である。第3番目の終了部門は、ランスクリプトで言えば〈断片1のVII面、VIII面、IX面〉である。これは、スタジオに同室しているが、焦点づけられていない集まりの終了と言える。ここでの終了は体系的でなく、個人がそれぞれに終了交換を行っている。もちろんマイクは無視された状態である。また、別の言い方をすれば、スタジオ空間をあとにするための終了とも呼べるものである。

次に開始（始まり）部分についてであるが、スタジオに入ってきたときに、開始のあいさつが（YとGによって）行われる。これが第3番目の始まりである。読者の皆さんにとっては、なぜ第3番目から始まるのか理解しにくい方もおられると思うが、〔図1〕を見てもらえれば、わかって頂けるだろう。そして第2番目の始まりが、テーブルの近くに寄ってきて、アナウンサー（I、G）そしてコメンテーター（K）とあいさつを交わし、席に着くところである。つまり、OnAir中ではないものの、コーナー開始のための準備が開始した状態のところである。ここでは、焦点づけられた集まりが、開始されたともとれる。最後に、第1番目の始まりである。それはもちろんコーナーの開始部分である。つまりマイクを通しての始まりである。

3つの終了と3つの始まりは、このように図示することができる。ゲストはこの構造の外から入ってくる。第3．第2．第1の順番で開始（始まり）部分を通過し、コーナーに参加する。そしてコーナーを終えると第1．第2．第3の順番で終了部分を通過してスタジオを去っていくのである。

## 6．まとめ

私たちは「番組の構造はどのようにスタジオ内の相互行為と結びついているのか。」という疑問点から出発した。それを分析可能にしてくれるのがコーナーの終了部分でありコーナーの開始部分であったのだ。3度も終了が行われていることに私たちは驚いた。しかもその3度の終了は実は異なっていてどれも必要なのだと私たちは考える。そしてそれと対するよう開始（始まり）部分も3度存在すると言えるだろう。<sup>(11)</sup>

ここで示した相互行為がラジオスタジオ、ラジオ放送を支えているということも可能であろう。私たちのこの分析はラジオスタジオ、ラジオ放送の制度を支える相互行為の分析と言えるのではなからうか。そして私たちの行った研究が制度研究としての相互行為分析の下地になれば幸いである。

（注）

（1）私たちがコーナーとよんでいるのは、人の配置が行われてから次の人の配置が行わ

れるまでのこととする。

- (2) トランスクリプトの記号とスタジオの配置図は、第1部のトランスクリプト例を参照。また、私たちがここで提示するトランスクリプトにおいて視線の表記が抜けているところがあるが、それは分析不能だったところである。
- (3) 正確には、このコーナーは、徳島ウエブリポートの「30分でわかる阿波の歴史シリーズ」の3回目である。内容は中世の阿波の歴史についてである。
- (4) 先終了句 (Pre-Closing) とは、シェグロフ&サックスによって作られた言葉で、正確には「先終了となる可能性のある句」と呼ばれてもよいのである。この句によって終了部門を適切に開始することができるようになる。詳しくは [シェグロフ&サックス, 1972=1995: 174-241] を参照。
- (5) 焦点づけられた集まりについては、[ゴッフマン, 1963: 35-55] を参照。
- (6) 「わかった」は「うん」「そうだね…」等と同じように先終了句のひとつである。詳しくは [シェグロフ&サックス, 1972=1995: 174-241] を参照。
- (7) バックリージョン (裏領域) と対するものとして、フロントリージョン (表局域) がある。フロントリージョン (表局域) はこのラジオ放送の場合 OnAir 中を指す。バックリージョン (裏局域) は OnAir 中でないときのことである。詳しくは [ゴッフマン, 1963: 35-155] を参照。
- (8) 詳しくは [西阪, 1997: 3-29] を参照。
- (9) なぜ第3番目の始まりなのかについては、次の節の [図1] を参照。
- (10) これはゲストを紹介し忘れていたということが、Sの発言によってわかった。
- (11) 開始が3度存在するかについては、もう少し議論の余地がある。

## 参考文献

- Goffman, Erving, 1959 "The Presentation of Self in Everyday Life", Doubleday & Company, Inc. =1974 石黒毅 訳「さまざまの局域と局域行動」, 『行為と演技—日常生活における自己呈示』 誠信書房: 124-163.
- Goffman, Erving, 1963 "Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings", The Free Press of Glencoe, 1980, 「焦点の定まらない相互作用」, 「焦点の定まった相互作用」, 丸木恵祐・本名信行 訳, 『集まりの構造—新しい日常行動論を求めて』, 誠信書房: 35-155.
- 森田聡之, 1997, 「気にすること・無視することの分析可能性」, 山崎敬一・西阪仰 編, 『語る身体・見る身体』, ハーベスト社: 99-122.
- 西阪仰, 1997, 「語る身体・見る身体」, 山崎敬一・西阪仰 編, 『語る身体・見る身体』, ハーベスト社: 3-29.
- 岡田光弘・山崎敬一・行岡哲男, 1997, 「救急医療現場の社会的な組織化」『語る身体・見る身体』, ハーベスト社: 168-185.
- Schegloff, E. A. and H. Sacks, 1972, "Opening up closing" .Semiotica 7: 289-327 = 1995 北澤裕・西阪仰訳「会話はどのように終了されるか」『日常性の解剖学』マルジュ社: 174-241.

山田富秋, 1995, 「会話分析の方法」, 『他者・関係・コミュニケーション』, 岩波書店:  
121-136.